GCOE ワーキングペーパー
次世代研究　109

満洲移民縁故者による歴史和解に向けた公共圏の構築

猪股 祐介
（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）

2013 年 2 月

京都大学グローバル COE
「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」
Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501　京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科
Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp　URL: http://www.gcoe-intimacy.jp/

はじめに

『満蒙終戦史』によれば、「満洲」★１には一九四五年八月九日の日ソ開戦時、約一五五万人の日本人が暮らしていた［満蒙同胞援護会、一九六二、 四四五頁］。その歴史はロシアの満洲経営が始まった一八九〇年代、ウラジオストクなどを経由して北満に入った日本人商人や売春婦に遡る★２。一九〇二年にはわずか一九〇二人であった在満日本人は、日露戦争により関東州と満鉄附属地が日本の支配下に入ったことで、一九〇六年一・七万人、一九一三年七・八万人と急増し、一九三一年には二四・二万人に達した。一九三二年の満洲国建国後は日本人の居住地域が満洲全域に広がったことにともない、人口も一九三五年四五・九万人、一九四二年一一三・七万人と劇的に増加し、一九四四年には一六六・二万人に膨れあがった［満蒙同胞援護会、一九六二、四四一――四四四頁、高橋康隆、一九九七、二六――三〇頁、若槻、一九九一、一六――一七頁］。

この在満日本人約半世紀の歴史の一コマに、満洲農業移民（以下満洲移民）の送出がある。満洲国建国の一九三二年に試験的に実施されたが、本格化するのは一九三六年「二〇ヵ年一〇〇万戸送出計画」が国策となってからであり、その歴史は長くない。また敗戦までの送出数二七万人は在満日本人の二割に満たない。このように満洲移民は在満日本人のごく一部を占めるに過ぎないが、戦後日本において頻繁に想起される「満洲の記憶」となっている。それは他の在満日本人に比べて、加害と被害を過剰に刻印された存在だからであろう。加害は「開拓」「開拓団」と称しながら、現地住民の既耕地を奪い地主的経営を行い、帝国日本の満洲支配の一翼を担ったことを指す★３。他方被害はソ連参戦から引揚げまでに約八万人の死亡者と約一万人の「中国残留日本人」を出した「引揚げの悲劇」を指す★４ 。特に「中国残留日本人」は帰国後の生活保障といった未解決の問題を多く抱え、全国各地で永住帰国者を原告とする国家賠償請求訴訟が起こされている。彼らは満洲が「過ぎ去らない過去」であることを端的に示す存在である。

中国東北地区（旧満洲）からは一九五八年に集団引揚げが打ち切られるまでに約一三〇・五万人が引揚げた★５が、満洲移民はその約一四％に当たる約一八万人である。満洲移民は戦後社会において再集団化し強固な引揚者集団を形成した点で、満洲引揚者のなかで特異であった。満洲移民であった集団引揚者約七・三万戸のうち約二・七万戸が戦後開拓事業に身を投じ、国内の未墾地に入植した［厚生省引揚援護庁 、一九五〇、一〇三頁］。つまり全体の三分の一を越える引揚者が、一般行政と区別される開拓地区で戦後の再出発を期したことになる。また引揚後の開拓団の解散にともない「拓友会」★６が団単位で結成され、引揚犠牲者を弔う慰霊祭をとり行う、慰霊碑を建立するなどの活動を通じて、他の満洲引揚者団体よりも強い結束を維持した。

本稿は岐阜県黒川村開拓団の後身の拓友会＝黒川分村遺族会をとりあげ、拓友会で満洲体験がいかに想起され綴られてきたかを考察するものである。岐阜県は戦後、満洲移民引揚者団体である拓友協会（一九七一年までは開拓自興会）の活動が盛んであり、一九七二年の日中国交正常化以降旧入植地の訪問を重点事業に掲げ、一九七八年の第一次友好訪中

団の派遣を皮切りに、二〇〇〇年までに六四回、一二五七人を派遣した。その実績は「全国開拓関係団体の追随を許さない金字塔」［岐阜県拓友協会、二〇〇四、五九頁］とされる。この岐阜県にあって黒川分村遺族会は、一九八一年に一回目の旧入植地の訪問を果たし、一九九一年の二回目の訪問をきっかけに旧入植地と地元自治体の国際交流事業を実現させ、二〇〇七年現在も活動を続けている唯一の拓友会である。その戦後史からみえてくるのは、拓友会と引揚者・地域社会・旧入植地との関係性の変化に応じて満洲体験が語り直される過程である。

第一節　問題意識

拓友会の活動は、満洲体験が想起され綴られるきっかけとなると同時に、地域社会や旧入植地との関係性を問い直すきっかけとなる。そして引揚者内部での満洲体験の共有とともに、外部社会に対する満洲体験の再定義が引き起こされ、拓友会での満洲体験の語りに変化が生じる。本稿の目的はこうした拓友会の活動にともなう満洲体験の語りの変化を描くことで、満洲の記憶の重層性を明らかにすることである。

拓友会での満洲体験の語りをみるにあたり、満洲移民・引揚者の手記を分析した先行研究が参考になる。成田龍一は引揚体験の考察は、引揚げが生じた出来事の時間（第一の時間）だけでなく、出来事が想起され綴られてきた時間（第二の時間）をも考慮に入れるべき［成田、二〇〇三、一五二頁］と主張する。満洲移民研究においては一九九〇年代以降、この「第二の時間」を強く意識した手記分析が散見されるようになった。

まず問題とされたのは、満洲移民の手記においてソ連参戦後の逃避行や引揚後の生活に対する被害者意識が前面に出され、敗戦前の植民地生活に対する加害者意識が欠けていることである［川村、二〇〇一、 尹、一九九〇］。これに対し蘭信三は、戦後日本の満洲移民の支配的言説と引揚者の対抗的言説の関係に注目し、引揚者の間で「ノスタルジアとしての満洲」が肥大化することを指摘している［蘭、二〇〇二］。戦後日本では満洲移民を「侵略の尖兵」とし、その加害者性を追及する言説が支配的であり、集団引揚者は満洲移民に関わった過去を公式の場で表明できなかったため、体験者同士の集まりで開拓団生活を美化され「ノスタルジアとしての満洲」を増幅されたという。また坂部晶子は、満洲引揚者でも軍人、官僚、技術者などエリート層では、満洲国を理想国家の建設として肯定する言説が根強いこと、他方大連引揚者の同窓会誌や文芸誌では、敗戦前の日常生活における個別的で断片的なエピソードが多いことを指摘している［坂部、二〇〇〇］。

ここから満洲移民をめぐる定型的な語りについて、次のような見取図が描ける。一方に戦後社会の支配的言説として満洲移民を「引揚げの犠牲者」とする「被害者の語り」と彼らを「侵略の尖兵」とする「加害者の語り」があり、他方に引揚者の対抗的言説として日常生活に根差した「ノスタルジアの語り」やエリート層に顕著な「満洲建設の語り」という対抗的言説があるという図式である★７。

こうした定型的な語りが満洲体験の典型として受け容れられるなか、そこから逸脱する

語りは抑圧される。引揚時にソ連兵や日本人にレイプされた女性の語りはそうした語りの一つである。古久保さくらは満洲移民の手記を分析し、レイプされた女性の語りが「日本人」「開拓団」が共有する「被害者」像と齟齬をきたすため、抑圧されることを明らかにした［古久保、一九九九］。たとえば開拓団を守るためにソ連兵に「慰安婦」として「提供」された女性たちについては、「敗戦国民の惨めさ」「開拓団のため」と「日本人」「開拓団」という共同性が強調されるばかりで、その後の消息が決して語られない。これは彼女らのレイプ経験自体が「日本人」「開拓団」という共同性から排除されているからとされる［古久保、一九九九、七頁］。敗戦後の「日本人」「開拓団」「家族」といった共同性の分裂を露呈する語りも避けられる。成田龍一は藤原てい『流れる星は生きている』について、引揚げが「日本人」「家族」という共同性の再考を迫る経験であったにも拘わらず、引揚過程でもそれが記述される「第二の時間」でも、突き詰めて考えられていないことを問題にしている［成田、二〇〇三、一五六――一六一頁］。

これら先行研究で指摘されたことは、拓友会での満洲体験の語りにもあてはまる。拓友会が団単位で結成され、引揚犠牲者の慰霊を目的としたことから容易に想像がつくように、拓友会の記念誌は「被害者の語り」「ノスタルジアの語り」や個別的・断片的なエピソードに満ちている。それらは開拓団という共同性を強化し、そこから逸脱する団内部の対立やソ連兵によるレイプの語りを避ける傾向にある。しかしそれと同時に、記念誌には、定型的な語りを離れ、これまで開拓団で共有されていなかった満洲体験が語り出されている箇所が見出せる。それらを拓友会での満洲体験の語りが、従来の開拓団という共同性をこえて、新たな共同性を開く可能性として読み取れないだろうか。本稿では黒川分村遺族会という拓友会の活動をたどることで、一九八〇年代に始まった旧入植地の訪問とその後の国際交流事業への展開が、拓友会という体験者同士の集まりをこえた共同性が開かれる可能性をもっていたことを示したい。そこで黒川開拓団の送出から引揚げまでの「正史」を『岐阜県満洲開拓史』等より把握した（第二節）のち、戦後拓友会の活動を一九六一年の招魂碑建立を一つの頂点とする慰霊と引揚者性の払拭が目的とされた時期、一九八〇年代以降の訪中団によって拓友会内部での満洲体験の語り直しと外部社会に対する再定義が起こった時期、そして一九九〇年代以降の国際交流事業が発展した時期、そして二〇〇〇年代の中日友好碑の建立とに分けて、一九八〇年代以降の満洲体験の語りの変化を検討する（第三節）。

第二節　黒川開拓団の概要★８

（一）送出

岐阜県加茂郡黒川村は東西約一六 km、南北四 km、総面積五八・六七平方 km、その九割近くを山林が占める寒村であった。川沿いにわずかに切り開かれた傾斜の強い田畑での農業は食糧自給もままならず、民有林からの木材と薪炭とでようやく生活が成り立つ経済状態であった。このため若者の大部分は小学校卒業と同時に、男子は大工や左官に弟子入

り、女子は製糸や紡績工に就職して村を出て行った。この世帯約八〇〇戸、人口四〇〇〇人弱の寒村の将来を憂えた村長藤井紳一は、一九三九年黒川村の全世帯の二割弱にあたる一五〇戸を満洲に送り出す分村計画をたてた。ここに黒川開拓団送出の取り組みが始まった。背景には岐阜県が一九三九年に移植民事務専任職員を設置、分村移民による過剰人口解消に積極的な姿勢をとっていたことがある。県議会議員を兼ねていた村長はこうした県政の動向に反応したのだろう。岐阜県の満洲移民送出数は全国七位の一万二三〇八人★９であった。

県や村の意気込みとは裏腹に村民の分村移民に対する反応は鈍く、応募者数は送出目標戸数を大きく下回った。そこで村内一二の部落に各一名の満洲開拓分村計画実行委員を設置し、部落ごとに送出戸数を割当て、確保する方式がとられた。人選は難航を極め、部落によっては籤引で決定したところもあった。また黒川村単独の送出をあきらめ、近隣の佐見村に勧誘の手を伸ばし、四四世帯の応募を得ている。一九四〇年入植地として吉林省扶余県陶頼昭が選ばれ、翌一九四一年三月の設営隊五名の入植を皮切りに、五月団長藤井武以下二〇名が入植、一九四二年には第一次本隊が入植し、一九四四年の第三次本隊の入植をもって全一二九戸六六一名の入植が完了した。送出目標戸数一五〇戸に対する計画達成率は約八六％であるが、一九四〇年以降五割前後に低迷していた全国平均値と比較すれば、かなり高い水準にある。この高い計画達成率を支えたのは、部落ごとに実行委員を設置して半強制的に移民戸数を確保させる村の施策であった。戦後黒川村及び合併後の白川町から黒川開拓団の引揚者に手厚い援助があったが、背景には戦前の村主導の強引な移民送出への負い目があったと思われる★１０。

（二）開拓団生活

長春とハルピンを結ぶ鉄路京浜線の中間に位置する陶頼昭駅は、松花江にかかる鉄橋に近く石炭・水の補給を行なう交通の要衝であった。黒川開拓団には鉄路防衛の役割も期待されていたと思われる。入植地は南を松花江、北を現地住民の集落が残る高台に接した水田三六〇町歩、畑四五〇町歩、原野五〇〇町歩、計一二六〇町歩の広大な土地であった。耕地はアルカリ性の比較的肥沃な土壌であった。これらの土地は満拓公社が現地住民の既耕地や住居を含めて廉価で強制的に買収したものだが、一九四一年の設営隊入植時に買収が完了していなかったことから、買収は拙速に行なわれたと思われる。

営農は一九四三年までの部落単位の協同経営から、一九四四年からは三世帯一グループの協同経営に移行した。畑は大豆八〇％、高粱二〇％の割合で作付されたが、一九四三年以降北海道馬鈴薯が作付けされ好成績を収めた。水田三六〇町歩のうち七〇町歩は朝鮮人に貸付けられた。畑、水田ともに強制買収で土地を奪われた現地住民を雇って耕作したようである。収穫はしばらく開拓団の食糧確保が精一杯という水準に低迷し、農産物の販売も極めて少なく、入植前の大きな期待を裏切る収穫に失望する団員も少なくなかった。一九四四年に入り園芸作物は販売できるほどの好成績を収め、営農もようやく軌道に乗った

かにみえたが、これが敗戦前最後の収穫となった。

現地住民とは比較的友好な関係が築いたとされる。特に近隣の来民開拓団が現地住民に対し日本語を押し付けたのとは対照的に、黒川開拓団は極力中国語を習得し現地住民との意思疎通に努めたという。両者の敗戦後の運命を分けた要因であったことが強調される。

（三）敗戦と引揚げ

一九四五年以降の根こそぎ動員により団長以下二〇名の成人男性が召集され、敗戦時団には年少の男子と老人婦女子のみがとり残された。団は一部落一〇戸前後からなる七部落に分散して入植していたが、敗戦後すぐに現地住民による「襲撃」が始まったため、団員は高い土塀に囲まれた本部とその近接集落の二箇所に集結した。団長は応召した藤井武に代わり安江新市が務め、近隣の来民開拓団全員自決の情報が伝わるなか、陶頼昭集結地での越冬が決断された。その理由ははっきりしないが、日本人避難民が陶頼昭駅に集まってきたことを根拠に、陶頼昭が集結地に指定されたため、開拓団には避難命令が出なかったとする見解が有力である。

現地住民による「襲撃」が四、五日続いたのち、ソ連兵が長春を経由して八月二三日に進駐して一一月の撤退まで駐留したが、その間ソ連兵による強奪や婦女暴行に悩まされた。ソ連軍撤退後は松花江を挟んで国民党軍と共産党軍が対峙し、陶頼昭は共産党軍の最前線となった。共産党軍は団員を陣地構築に駆り出す一方でコーリャンの配給を行い、治安の安定につとめた。団員と現地住民の友好な関係は変わらず、健康な団員は現地住民の農業や家事を手伝い糊口をしのいだという。

しかし同じころ寒波の到来に加え、避難民が持ち込んだ発疹チブスが団全体に蔓延し、安江団長以下多くの団員が命を落とした。以後団は引揚げまで義勇隊開拓団出身の避難民四名によって運営された。一部の団員は零下三五度まで下がる厳寒期に備えて集結地の庭に穴を掘って生活した。日本引揚げまでの一年余続いた陶頼昭での集団生活を通して開拓団の共同性が高まり★１１、戦後の拓友会結成の原動力となったと思われる。

日本に向けて陶頼昭を後にしたのは翌一九四六年の八月一三日のことであった。鉄道沿いに四日間歩いて徳恵駅に出て無蓋貨車に乗り、長春に出て日本人難民収容所に入った。引揚げ手続きは二〇日程で終わり、九月五日長春を出発、瀋陽、錦州を経てコロ島より乗船、博多港に上陸して九月二三日黒川村への帰郷を果たした。黒川開拓団の引揚状況は在籍者六六一名［応召者二〇名含む］のうち死亡者二〇二名、未帰還者三名、生還者四五六名である。

第三節　黒川分村遺族会の活動

（一）招魂碑の建立――一九七〇年代以前の活動

一九四六年九月の集団引揚げにともない、開拓団は黒川分村遺族会［以下遺族会と略す］に改組された。名称こそ「遺族会」だが、ほとんどの会員が元開拓団員であり、実態は拓

友会である。その活動の第一の目的は引揚犠牲者の慰霊であり、翌一九四七年より黒川村の佐久良太神社で毎年慰霊祭が開かれた。一九六一年に招魂碑が建立されてからは隔年の開催となり、現在に至る［岐阜県拓友協会、二〇〇四、 一七六――一七九頁］。

遺族会にとって招魂碑の建立は「生きて帰った者の当然の義務」であり、引揚げ以来の悲願であった。黒川村と近隣四ヶ町村の合併がとりざたされるようになった一九五〇年頃から、黒川村からの補助金を期待していた遺族会では、「黒川村の分村という言葉も通用しなくなる」という焦りとともに、拓魂碑建立の気運が高まった。結局資金が集まらないままに一九五六年の白川町との合併を迎えてしまうが、白川町は遺族会の陳情を受け入れ一〇万円の補助金を出した。これに黒川地区協議会からの寄付五万円と遺族会員等からの寄付五万円をあわせて建立基金とし、一九六一年招魂碑は完成をみた［岐阜県拓友協会、二〇〇四、一七六――一七七頁］。

この招魂碑の建立をもって引揚げからの区切りがついたと安堵する会員も多かった。それは引揚犠牲者の慰霊と並んで、厄介者や乞食の代名詞のように言われた「引揚者」という負のレッテルを払拭することが、この時期の遺族会の活動目的であったからである。そもそも招魂碑の資金には、「引き揚げ更生会」★１２の事務所とトラックの売却資金が充てられる予定であった。「引き揚げ更生会」は食料品や薪炭の売買でそれなりの利益を上げていたが、トラックの故障を機に「引揚げ更生会の看板を外して打って、異郷に眠る同士の招魂碑を建立して、引き揚げ者から脱皮しようという意見が多数を占めた」［岐阜県拓友協会、二〇〇四、一七五頁］という。そして招魂碑の除幕式の席上では、会員から「いつまでも引き揚げ者引き揚げ者と甘えていては駄目だ、この際役場から受けている遺族会補助金は返上して自分達の力だけで運営しよう」［岐阜県拓友協会、二〇〇四、一七七頁］との意見がでた。以後補助金の返上は一九九一年に遺族会と旧入植地との交流が本格化するまで続いた。遺族会が招魂碑の建立にこめた引揚者からの脱却への強い思いは、当時の引揚者に注がれたまなざしがいかに冷たかったかを物語っている。

なお招魂碑とその周辺は一九八一年の第一回訪中団以後手が加えられ、「乙女の碑」「墓参記念碑」など新らたな碑や碑文の追加、井垣の修繕等が行われてきた。招魂碑周辺は現在の遺族会の活動を記憶するコメモレイションの場となり、建立当初の引揚犠牲者の慰霊から黒川開拓団ならびに遺族会の顕彰にその比重を移していることが窺える★１３。

（二）訪中団の派遣――一九八〇年代の活動

一九七二年の日中国交正常化をうけて、岐阜県拓友協会は訪中団の派遣を申請した。表向きは農業と文化面の交流を目的とする友好訪問だが、実態は墓参と残留日本人の調査を目的とする旧入植地訪問であった。一九七七年待望の第一次「岐阜県農業関係者友好訪中団」の中国側受入同意書が日中友好協会経由で届き、翌年岐阜県初の訪中団が派遣された。岐阜県拓友協会主催の訪中団派遣は二〇〇〇年まで続けられ、派遣回数六四回、参加者一、二五七名に達した［岐阜県拓友協会、二〇〇四、 一七六――一七九頁］。

黒川分村遺族会も単独開拓団による訪中団派遣を申請したが、拓友協会は集団自決で多くの犠牲者を出した開拓団を優先させる方針をとったため、白川町農業訪中団の派遣は一九八一年にずれ込んだ。以後、黒川分村遺族会の旧入植地陶頼昭の訪問は一九八一、一九九一、一九九四、一九九七、一九九八、二〇〇〇年と続いている［岐阜県拓友協会、二〇〇四、一八一――一八三頁］。

陶頼昭訪問のもっとも重要な目的は「慰霊」であった。黒川開拓団の引揚犠牲者の大半は敗戦後陶頼昭に留まった一年間に集中し、遺体は極限状況下にあって埋葬する余裕なく本部附近の丘に掘った穴に投げ入れた状態であった。陶頼昭を訪れた遺族会員が黙祷を捧げる丘には、戦後六〇年経た現在も白骨が散乱している。遺族会員は遺骨収集を強く望んでいるものの、現地住民のかつての植民者に対する感情を考慮し、その実現は絶望的な状況にあることを認識している。遺族会の思いは一九九一年第二次訪中団に参加した男性がもらした「できることなら、慰霊碑を建立したいと思うが、ここは日本ではないのだ」［黒川分村遺族会、一九九一、 五六頁］という感想に集約されよう。

ただ訪中団は回を重ねるうちに、その目的も慰霊一辺倒ではなくなっていく。特に一九八一年の第一次とそれから一〇年が経った第二次以降では大きな変化がみられる。まず戦後はじめて陶頼昭を訪れるという緊張から解放され、訪中団を迎える現地住民に目を向ける余裕ができたことが指摘できる。たとえば一九九一年第二次訪中団に参加した男性は次のようなエピソードを紹介している。

北陶頼昭郷長さんはあいさつの中で「私たちは、戦前入植していた開拓団の皆さんから稲作りの技術を教わりました。味も大変良いので昼食のときは充分味わって下さい」と言われた。私は小学校五年の秋、学校から稲刈り奉仕にでた。出来の悪い田もあって火をつけて焼き払った田も沢山あった。その開拓団の稲作り技術が五十年過ぎた今日、生かされている、何と云う寛大な民族性なのか［黒川分村遺族会、一九九一、 三五頁］。

現地役人が語る「開拓団の稲作技術」を額面通りに受け取るのではなく、満洲での加害体験と照らして「寛大な民族性」をみる遺族会員の感想からは、心の余裕とともに加害者意識の芽生えが読み取れよう。現地住民が訪中団に実際どのような感情を抱いていたかはまた別の問題だが、遺族会の目に寛大と映った現地住民による歓待は旧入植地との国際交流を遺族会の責務と捉える原体験となった。

訪中団の派遣が遺族会にもたらしたものは旧入植地の住民の再認識にとどまらない。かつての団員と寝食をともにするなかで、また帰国後に訪中を記念して記念誌や記念碑を制作するなかで、満洲体験が改めて想起され綴られ、遺族会における満洲の記憶の再編が促された。一九八一年第一次訪中団帰国後に建立された「乙女の碑」はその一例である。敗戦後の本部集結の際、団をソ連兵の略奪や暴行から守るために一部の女性が「慰安婦」として犠牲になった過去は、引揚後表立って語られることはなかった。しかし訪中団におい

て女性だけが集まり話し合う機会が持たれたことで、これまで抑圧されてきた記憶は堰を切って溢れだす。一九八一年第一次訪中団に参加した女性は次のように振り返っている。

お茶を飲みながら当時の思い出話しとなる。皆さんそれぞれ苦しかったこと、悲しかったこと、話し合っている内にあと一日で陶頼昭にいけるという気持ちも手伝って泣き乍ら話した。思い出すまい、忘れたいと心に決めているのに、なぜ今尚鮮明に私の心にこみあげてくるものは一体何だろう？あの時のくやしさ、悲しさ、情け無さ、忘れたいと思うほど、こみ上げてくる涙となって私を苦しめる［黒川分村遺族会、一九八一、四九頁］。

このことをきっかけとして、長年女性を苦しめ続けてきた引揚げの記憶は、遺族会で改めて認識されることとなり、帰国後「乙女の碑」建立に結実した。白川町広報には遺族会が寄稿した次のような記事が掲載されている。

幸い、治安を維持するソ連軍憲兵の力を借りて治安も少しずつよくなって、かろうじて集団自決の大事だけは免れました。しかし、その陰には当時のうら若い乙女たちの尊い、かつ痛ましい青春の犠牲があったのです。（中略）これが、開拓団の陶頼昭における最大の痛ましい、屈辱的な事件で、私たち開拓団員はそのことについて固く口をとざしてきたのですが、あれから三十六年、無事引き揚げた団員はその乙女たちになんらかの形で償いをしなければと、ここに「乙女の碑」建立の運びとなりました［白川町、一九八二、 九頁］。

遺族会内部に留められてきた「屈辱的な事件」は三六年のときを経てようやく、「乙女の碑」や広報誌を通じてその存在が知られるようになった。ただ広報誌の記事でも「当時のうら若い乙女たちの尊い、かつ痛ましい青春の犠牲」と婉曲に表現されているように、彼女らの体験が語られる新たな共同性ができたわけではなかった。それは戦後六〇年以上が経過した二〇〇五年の時点においても、遺族会という共同性のなかでは語り得ない生々しい過去である。肉親に犠牲者をもつ女性は、私のインタビューに次のように答えている。

言っていいのか悪いのか。それは全部言っては悪いと思うとこもあるし。そういうのもあの当時のあの情勢。まあそれは個人のことはいいけども、全体としてみたときに、ある程度までは言えるけど、あるところから向うへは、やっぱりひとに言えんことがあるね。私らはまだ子どもやったけども。団の汚名になるといかんしね。そうやったや。せやけども、いまで言うと、私はいまそれ言うと大問題になるようなことやないかと思う［二〇〇五年一〇月二八日、岐阜県白川町黒川］。

それでも訪中団において女性たちの間で「慰安婦」となった過去が語られ、記念誌にその過去に苛まれる女性の苦しみが綴られ、遺族会が彼女らに「乙女の碑」の建立というかた

ちで応えたことの意味は大きい。一九六一年の招魂碑建立の時点では、遺族会では慰霊と引揚者性の払拭というかたちで、満洲という過去からの決別が目指されていた。だが一九八〇年代訪中団の派遣と記念誌・記念碑の制作によって、満洲体験と向き合うことになったのである。

最後に訪中団が満洲体験を持たない世代が遺族会活動に積極的に関わる転機となったことを指摘しておきたい。一九九四年の第三次訪中団以降、元団員の家族も参加するようになった。黒川開拓団の元団員を義父にもつ女性は、一九九四年の訪中団に参加した感想を次のように書いている。

長春の宿で、父と家族と一行の、満州引き揚げの様子を聞いた内容は、意外で、とても信じられない出来事でしたが、それをも含め、私達がこれから成すべき事はしっかりと見据えていかなければならないと痛感した次第です。訪中で特に強く思った事は、日中平和のため、藤井恒さんをはじめ、ご尽力下さった皆様のご指導の下、私達に何かひとつ出来る事があれば、させて頂きたい、ということです。こうして参加するまでは、「何で慰霊祭に私達まで参加しなくてはならないの？」と正直言って逃げようとしていたのに、全く思っても見なかった感情移行に、私自身驚いている次第です［黒川分村遺族会、一九九四、七一頁］。

ほかの参加者から親世代の満洲体験を直に聞き取り、またかつての入植地を実際に立つことで、自らのルーツを再確認するとともに、親世代が日中友好にかける思いを理解する。遺族会の世代継承を考えるうえでも、訪中団は重要な意味を持っていたといえる。

（三）国際交流事業の展開――一九九〇年代の活動

旧入植地との国際交流事業は、一九九一年第二次訪中団が陶頼昭を訪問した際、当時陶頼昭が所在した扶余市の市長等を白川町に招聘したことから始まった。扶余市長の招聘の費用は遺族会員からの寄付で賄われたが、寄付を募る趣意書★１４からは陶頼昭での歓待への感謝が、要人招聘につながったことがうかがえる。寄付は一ヶ月の間に二〇〇万円余以上集まり成功を収めたものの、扶余市長ら四名の日本滞在の経費は約七八万円に達し、遺族会だけでは国際交流事業は続けられないことが認識された。また遺族会員の高齢化の問題もある。さらに一九九二年中国の行政改革により扶余市が近隣四市県と合併して人口二五六万人の松原市となり、陶頼昭との窓口が松原市外事弁公室に移ったことで、国際交流事業は遺族会の手に負えないものとなった［岐阜県拓友協会、二〇〇四、 一九六――二〇一頁］。

そこで遺族会は白川町の国際交流事業の一環に位置づけるべく町に働きかけた。遺族会長は白川町が一九八四年より姉妹都市のイタリア・ピストイア市に中学生代表を隔年に派遣していたことに目をつけ、その間の年に松原市へ中学生代表を派遣する青少年交流を提

案した。遺族会長の構想は一九九九年「環太平洋ふれあいの輪派遣事業」による教育関係者の松原市訪問をきっかけに具体化し、同年白川町と松原市の間でホームステイを中心とする青少年交流事業を実施することが正式に決定された。七月には第一次松原市青少年訪日団が白川町を訪問、翌二〇〇〇年八 月白川町から中学生代表が松原市に派遣され、以後一年ごと交互に訪問が行われている［岐阜県拓友協会、二〇〇四、一九九――二〇五頁］★１５。

この青少年事業は一九九九年に始まったばかりであり、二〇〇三年の SARS 騒動による中止もあって松原市・白川町ともに二回ずつの派遣が実施されたに過ぎず、その成果を論じるには時期尚早といえよう。ただ白川町青少年訪中団の体験記に目を通した限りでは、一週間という短い日程や語学力不足から、ホームステイによる交流があまりうまくいっていないことがうかがえる。また遺族会が当初期待したような、黒川開拓団の陶頼昭入植という過去に触れる試みもなされていないようである。ある参加者の陶頼昭の印象を引用すれば次のようなものである。

陶頼昭では、昔の日本に似た姿がありました。動物が歩き、道はガタガタという、日本では考えられないような場所でした。自分が予想していたのより全然違って驚きました。長春や松原市と比べてみると、とても貧しく見えて、それは学校にも言えることでした。それを見て中国という大きな国の中で大きな差を見ました［白川町、二〇〇二、 三頁］。

これは二〇〇〇年の第一次訪中団に参加した中学生の感想だが、彼にとって陶頼昭はホームステイ先の松原市と比べてもはるかに貧しい農村に過ぎない。中学生にさきの戦争に対する歴史認識を深める機会を与えるのは、陶頼昭よりも長春の偽皇宮博物館の展示である。

他方松原市からの訪日団についていえば、遺族会は松原市の都市部在住の役人子弟ばかりが選抜されることに不満をもらしている。これは訪日団にかかる旅費が全額個人負担であり、陶頼昭のような農村からは参加が難しいからである。遺族会はこの国際交流事業の意義を戦前黒川開拓団が現地住民に与えた被害への罪滅ぼしに見出している以上、なるべく陶頼昭住民を招待したいというのが本音である。一九九九年の訪日団では遺族会が松原市に一人分の負担金一五万円を出すことで、ようやく陶頼昭からの一名の参加が確保された［岐阜県拓友協会、二〇〇四、二〇二頁］。またより根本的な問題としては、松原市にとっての国際交流のメリットが見出しにくいことが挙げられる。石油採掘の好景気にわく人口二七七万人の松原市は、過疎に悩む人口一万人の白川町に何を求めているのか。遺族会による扶余市長招聘に始まった国際交流の先行きはなお不透明である。

（四）中日友好碑の建立――二〇〇〇年代の活動

これまで遺族会は陶頼昭に慰霊碑や墓碑を建設することを悲願としつつも、現地の政府当局者の立場や住民感情に配慮し断念するという立場をとってきた。他方で松原市との青

少年交流において陶頼昭の比重は小さく、このままでは元団員が亡くなればかつての入植地を訪れるものが絶えるのではないかという懸念もあった。そこで考えられたのが、陶頼昭に黒川開拓団入植のシンボルとなる碑を建立する計画である。二〇〇〇年から断続的に陶頼昭鎮人民政府との交渉を重ねてきた結果、二〇〇四年五月中日友好碑建立の許可が下り、訪中団を派遣して具体的な条件が詰められた。交渉の結果建設地を老人ホーム前とすること、白川町側が土地の永代使用料四〇万円、建設費四〇万円、老人ホームの改修費一〇〇万円を負担することで妥結をみた。これらの条件は友好碑の維持管理を老人ホームに委託する見返りとして提示されたものであった。総経費一八〇万円は白川町が土地の永代使用料と建設費の八〇万円を、遺族会が老人ホームの改修費一〇〇万円を負担するかたちで工面された［藤井恒所蔵ファイル］。

友好碑建立の過程で問題となったのは碑文の内容であった。遺族会は現地住民の感情を害さない範囲で戦前の黒川開拓団の入植や戦後の白川町と松原市の交流を記すべく、次のような碑文案を作成した。

一九四一年日本国岐阜県白川町の住民六〇〇余名が、この地に在住し一九四六年日本に引き揚げた。一九七八年中日平和友好条約が締結された。爾後相互交流が再開され、今日まで白川町から一七八名が松原市を訪問し、一方松原市からの白川町訪問者は四〇名に達した。悠久の平和と中日両国友好の永遠を念願し、この碑を建立する［藤井恒所蔵ファイル］

だが陶頼昭鎮人民政府は難色を示したため、結局「悠久の平和と中日両国友好の永遠を念願し、この碑を建立する」という末尾の一文が採用され、碑文は抽象的な表現に落ち着いた。このことは歴史認識について、日中の地方自治体レベルで交渉できる時機にないことをうかがわせる。また遺族会の「黒川開拓団入植のシンボル」という当初の目的が達せられたか、大いに疑問が残るところである。ただ慰霊施設は施設の形態以上に、その後の運用によって意味づけが大きく左右されるものである。中日友好碑についていえば、白川町青少年訪中団のスケジュールにどう組み込まれるかが鍵となるだろう。

むすび

本稿では岐阜県黒川分村遺族会の活動を検討することで、満洲体験の語りが一九八〇年代以降の旧入植地訪問をきっかけに変容する過程を明らかにした。訪中団派遣以前の慰霊祭を中心とする活動では、引揚犠牲者の慰霊と引揚者性の払拭が目指されていたが、一九八一年の旧入植地陶頼昭の訪問以降、遺族会に次の三つの変化が生じた。第一に陶頼昭での熱烈な歓迎に接して、現地住民に対する加害者意識が芽生えた。第二に元団員が陶頼昭訪問という共通の目的をもち寝食をともにするなかで、これまで「屈辱」として抑圧されてきた記憶が語り出された。第三に満洲体験を持たない世代の遺族会参加が促された。このように遺族会活動に慰霊という文脈とは異なる、満洲体験の再定義という新らたな文脈

が生まれたのである。

さらに遺族会の変化は、岐阜県白川町と吉林省松原市の国際交流事業に結実した。これは遺族会内の世代間伝達、さらには白川町における満洲の記憶の継承を考えるうえで興味深い取り組みといえる。ただ人口二七七万人を抱える松原市にとって陶頼昭は辺鄙な片田舎であるに過ぎず、松原市相手の国際交流事業が陶頼昭という満洲の記憶とのつながりを維持するものになるかは予断を許さない。同様の懸念は黒川開拓団の足跡を残すべく建立された中日友好碑にもあてはまる。碑文は黒川開拓団の旧入植地であった過去を伝えるものでないこともあり、中日友好碑が白川町と松原市の国際交流事業のなかにうまく組み込まれなければ、その建立の経緯も次第に忘れられてしまう懼れがある。

二〇〇五年九月、中日友好碑の視察を兼ねた白川町松原市訪問団に同行した。参加者二五名のうち遺族会員は一七名、さらにそのうち一三名が黒川開拓団の元団員であった。彼らの多くは中日友好碑を陶頼昭で亡くなった肉親の霊を弔う慰霊碑と捉えており、遺族会の長年の悲願が達成されたことで、遺族会の活動にも一つの区切りがついたと考えていた。他方元団員の子弟で満洲体験をもたない遺族会員の一人は、中日友好碑もって白川町と松原市が黒川開拓団という過去を受け止めたこととし、今後は過去にとらわれない多様な関係を築いていきたいという。遺族会主体の松原市訪問団はこれが最後となるが、遺族会が訪中団の派遣や記念誌・記念碑の制作を通じて培ってきた「満洲の記憶」が、次世代の国際交流事業受け継がれることを切に願う。

付記

本稿は平成一七年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。また黒川分村遺族会長藤井恒氏には聞き取りや資料提供で多大なご尽力をして頂いたうえ、白川町松原市訪問団に同行する機会を与えて頂いた。藤井恒氏はじめ黒川分村遺族会のみなさまにこの場を借りて深く感謝します。

注

★１帝国日本による「満洲」支配の侵略性を鮮明にするために、「満洲」「満洲国」等は括弧をつけて表記されるべきだが、煩雑となるため以下括弧を省略する。なお日本では満州と満洲、二通りの漢字表記がみられるが、江戸時代にすでに両者の混用がみられるという［中見、二〇〇二、 八三頁］。本稿での表記は便宜上、戦前一般的であった満洲に統一する。ただし書名や引用はもとの表記を優先させることとする。

★２明治維新後はじめて満洲の土地を踏んだ日本人は、一八七二年征韓に関する情報収集を目的に営口に入港した一行とされる［小峰、一九九一、 八九――九一頁］。ただし彼らは一時滞在者であり、満洲で暮らしていたとは言い難い。

★３浅田喬二は満洲移民の加害者的側面を三つの領域において指摘している［満州移民史研究会、一九七六］。（一）政策目標、「対ソ防衛」「治安維持」「日本的秩序」という軍事的・

政治的目的を有した。（二）送出効果、貧農層を満洲に送出することで、国内の地主――小作の階級的対立の回避が図られた。（三）営農形態、既耕地に入植、現地住民の労働力に依存し富農化・地主化した。近年では（一）について、一九三九年以降満洲移民は「ブロック内食糧自給計画」の一環に組み込まれたとする立場から、「食糧増産」を主要目的とみなす見解も有力である［玉、一九九九、 一一二――一二一頁］。

★４満洲移民の在籍者数二七万人、死亡者約八万人、残留者一万人という数字は満洲開拓史刊行史［一九六六、四三六――四三七頁］による。なお満洲移民の死亡率約三〇%は、一般在満日本人の死亡率七・五%［在籍者数一二八万人、死亡者九・六万人］と比べて遥かに高い水準にある。

★５ 集団引揚げの中止、中国残留日本人の形成を丁寧に分析した歴史研究に、南誠［二〇〇三、 八四――一一六一頁］がある。

★６拓友会は軍隊の戦友会に相当する。拓友会の呼称は開拓団ごとにまちまちである。

★７蘭は比較的早い時期から、戦後日本社会に「満洲の否定／肯定」という「公式／非公式」の二つの支配的な語りがあることを指摘していた［蘭、一九九四、三一八――九］。ただこうした見方だけでは満洲言説の通時的な変容を把握できないだけでなく、共時的な言説の布置を戦後社会と引揚者の二項図式に切り詰め、両者の相互規定性や内部の葛藤を見落としてしまう懼れがある

★８本章は特に断りのない限り、岐阜県満洲開拓史刊行会［一九七六、 三三三――三四二頁］による。

★９都道府県別満洲移民送出数一九四五年五月時点の上位五位は以下の通り。長野（三・七九万人）、山形（一・二七万人）、熊本（一・二七万人）、福島（一・二七万人）、新潟（一・二六万人）、括弧内は送出数の概数。以下宮城、岐阜、広島、東京、高知と続く［蘭、一九九四、 五九頁］。

★１０団長藤井武の長男であり黒川分村遺族会長である藤井恒（一九三三年生）は、元青年学校長の次のような発言を紹介している。「武さんを始め満州へ行った皆さんには、本当に悪いことをしてしまいました。終戦後、満州から引揚げが始まると噂が流れたとき、帰った開拓団の方に顔向けが出来ない、と当時分村に携わった者の内、一人は岐阜の病院へ身を潜め、一人は炭焼きとして山に籠り、私は県下でも一番不便なところに転任させてくれと県にお願いして、養老の山奥に赴任しました（後略）」。以上の発言は一九八八年三二年ぶりに黒川を訪れたときのものとされるが、分村移民推進者の開拓団に対する負い目が滲みでている［黒川分村遺族会、一九九五、四二頁］。

★１１敗戦後の開拓団生活の共同化がもたらした効果については、蘭［一九九四、 二〇八頁］を参照のこと。

★１２「引き揚げ更生会」は厚生省引揚援護庁が引揚者の再起更生のため実施した生業資金と黒川村議会からの補助金をあわせた、八十世帯八万円の資金を元手に始まった。事務所は黒川村の中心地に開設され、元開拓団幹部だった事務員が常駐していた［岐阜県拓友

協会、二〇〇四、一七五頁]。
★１３戦友会の慰霊行事を慰霊／顕彰の二側面より整理した、新田［一九八三］を参考にした。新田は慰霊の極に会合での語り合いを、顕彰の極に慰霊碑と部隊史を置き、その中間に慰霊祭を置いているが、拓友会の場合慰霊碑や部隊史に顕彰の側面が出るのは一九八〇年代以降のことと思われる。それ以前は引揚犠牲者の慰霊が主であった。
★１４趣意書から重要な箇所を抜粋すれば以下の通り。「終戦後のあの混乱、その上の難民集団生活に私たちは筆舌に尽くせぬ程の苦しみに遭いましたが、現地の人達も日本の侵略によって、私達以上の苦しみに遭った事でしょう。五十年近い歳月の流れは、現地の人達の間では一片の憎しみの陰もなく各地で熱烈歓迎と笑顔で私達を迎えた姿に接し、今度は私達が現地の人達を日本に一度は招待しなければと考え（後略)」［岐阜県拓友協会、二〇〇四、 一九六頁]。ここでは敗戦後の引揚体験に対する被害者意識よりも現地住民に対する贖罪意識が強調されている。
★１５定員は白川町青少年訪中団が七名、松原市青少年訪日団が六名であり、ともに七泊八日の滞在である。日程は注１６を参照のこと。
★１６白川町青少年訪中団の日程は二〇〇〇年、二〇〇二年ともに以下の通り。
一日目：訪問地＝北京、長春［泊]、内容＝移動
二日目：訪問地＝長春、松原［ホームステイ]、内容＝表敬訪問
三日目：訪問地＝松原［ホームステイ]、内容＝市内観光
四日目：訪問地＝長春、陶頼昭、三岔河［泊]、内容＝表敬訪問
五日目：訪問地＝三岔河、陶頼昭、長春［泊]、内容＝開拓団跡訪問
六日目：訪問地＝長春、北京［泊]、内容＝長春市内観光
七日目：訪問地＝北京［泊]、内容＝北京市内観光
八日目：訪問地＝北京、帰国、内容＝移動

文献
蘭信三、一九九四、『『満州移民』の歴史社会学』行路社
蘭信三、二〇〇二、「『満洲移民』の問いかけるもの」『環』藤原書店、一〇号
古久保さくら、一九九九、「満州における日本人女性の経験、犠牲者性の構築」『女性史学』九号
岐阜県満洲開拓史刊行会、一九七六、『岐阜県満洲開拓史』岐阜県開拓史刊行会
岐阜県拓友協会、二〇〇四、『岐阜県拓友協会の記録』岐阜県拓友協会
川村邦光、二〇〇一、「植民地経験と“内地人”」栗原彬ほか編『越境する知六　知の植民地 越境する』東京大学出版会
小峰和夫、一九九一、『満洲、起源・植民・覇権』御茶の水書房
厚生省引揚援護庁、一九五〇、『引揚げ援護の記録』厚生省
黒川分村遺族会、一九八一、『陶頼昭を訪ねて』私家版

黒川分村遺族会、一九九一、『陶頼昭壙埌の丘へ』私家版
黒川分村遺族会、一九九四、『郷愁の里陶頼昭』私家版
黒川分村遺族会、一九九五、『返事の来ない手紙』私家版
満蒙同胞援護会、一九六二、『満蒙終戦史』河出書房新社
満州移民史研究会、一九七六、『日本帝国主義の満州移民』龍渓書舎
満洲開拓史刊行会、一九六六、『満洲開拓史』満洲開拓史刊行会
南誠、二〇〇三、「『中国帰国者』の歴史的形成に関する一考察、『中国残留日本人』の残留と帰国をめぐって」蘭信三『『中国帰国者』の社会的適応と共生に関する総合的研究、『中国帰国者』は国民国家を超えるか』平成一二――一五年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）（一）（課題番号、一三四一〇〇四八）中間報告書
中見立夫、二〇〇二、「歴史のなかの“満洲”」『環』藤原書店、一〇号
成田龍一、二〇〇三、「『引揚げ』に関する序章」『思想』岩波書店、九五五号
新田光子、一九八三、「慰霊と戦友会」高橋三郎ほか『共同研究戦友会』田畑書店
坂部晶子 、二〇〇〇「植民地の記憶の社会学、日本人にとっての『満洲』経験」『ソシオロジ』四四巻三号
白川町、一九八二、『しらかわ（白川町広報)』白川町
白川町、二〇〇二、『第二回白川町青少年中国松原市派遣団体験記集』白川町
高橋康隆、一九九七、『昭和戦前期の農村と満州移民』吉川弘文館
玉真之介、一九九九、「総力戦下の『ブロック内食糧自給構想』と満洲農業移民」『歴史学研究』七二九号
若槻泰雄、一九九一、『戦後引揚げの記録（新版)』時事通信社
尹健次、一九九〇、『孤絶の歴史意識、日本国家と日本人』岩波書店

2011 年度次世代研究「満洲移民縁故者による歴史和解に向けた公共圏の構築」（研究代表：猪股祐介）による成果である。

【メンバー】（ ）内は 2011 年度プロジェクト時点

猪股 祐介（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）